



アルフレッド・ギユ 《コンカルノーの鰯加工場で働く娘たち》1896年頃 カンペール美術館 Collection du musée des beaux-arts de Quimper, France

カンペール美術館所蔵  
ブルターニュの  
光と風

フランス 神秘と伝統の地へ

2023年9月5日(火) - 10月22日(日)

ブーダン、モネから  
ゴーギャン、ドニ、コッテまで

【プレスリリースのお問い合わせ】 展覧会担当：深尾・山本 広報担当：岡田・大庭

静岡市美術館 〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F

SHIZUKA CITY MUSEUM of ART tel. 054-273-1515 (代表) fax. 054-273-1518 www.shizubi.jp

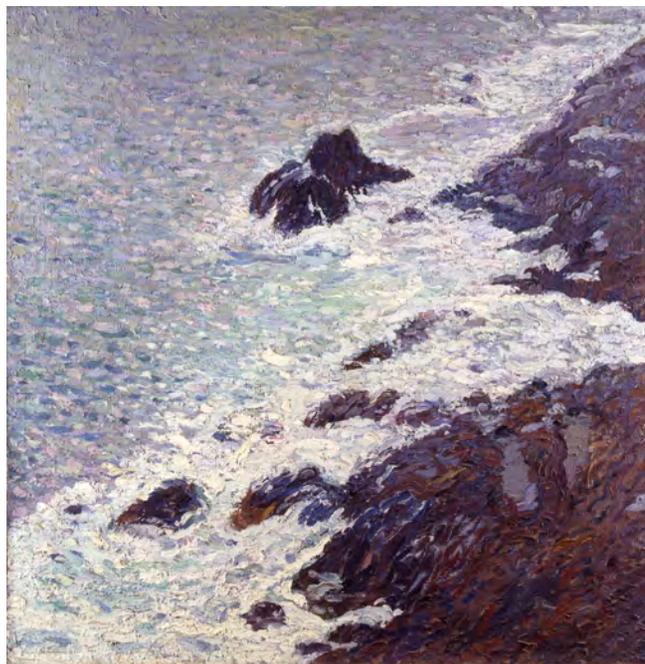
カンペール美術館所蔵

# ブルターニュの光と風

## フランス 神秘と伝統の地へ

フランス北西部、大西洋と英仏海峡の間にせり出すブルターニュ半島は、岩々が露出した岬やエメラルドグリーン的大海、起伏に富んだ大地が作り出す壮大な自然景観を有することで知られます。中世にはこの地域一帯で一つの国が生まれ、ケルト民族に由来する独自の文化が育まれました。フランスの地域圏になってからも、その郷土色あふれる風俗や風景は保たれ、鉄道網が発達した 19 世紀以降、多くの画家たちがこの地を訪れました。

本展ではフランス・カンペール美術館のコレクションを中心に、ウジェーヌ・ブーダン、ギュスターヴ・クールベ、クロード・モネ、ポール・ゴーギャン、モーリス・ドニラ 45 作家による約 70 点の絵画作品を通して、ブルターニュという場所の魅力をひも解きつつ、この地にゆかりのある画家たちと、彼らが編み出した多様な芸術表現をご紹介します。首都パリとは一味ちがう、神秘と伝統の地ブルターニュへと皆様をご案内します。



アンリ・ジャン・ギヨーム・マルタン 《ブルターニュの海》1900 年  
油彩/カンヴァス

以下、所蔵先のないものはすべてカンペール美術館 Collection du musée des beaux-arts de Quimper, France

■会期：2023 年 9 月 5 日（火）－10 月 22 日（日）

■休館日：毎週月曜日

※ただし 9 月 18 日（月）、10 月 9 日（月）は開館、9 月 19 日（火）、10 月 10 日（火）は休館

■開館時間：10:00－19:00（展示室入場は閉館の 30 分前まで）

■観覧料：一般 1,400（1,200）円、大高生・70 歳以上 1,000（800）円、中学生以下無料

お得な一般前売ペアチケット 2 枚 1 組 2,200 円

\*（ ）内は前売および当日に限り 20 名以上の団体料金

\*障がい者手帳等をご持参の方および必要な付添の方原則 1 名は無料

■前売券・一般前売ペアチケット：7 月 22 日（土）から 9 月 4 日（月）まで販売

■当館ホームページ（[www.shizubi.jp](http://www.shizubi.jp)）より日時指定予約ができます。詳細は HP をご覧ください。

■主催等

主催：静岡市、静岡市美術館 指定管理者（公財）静岡市文化振興財団、静岡新聞社・静岡放送

後援（予定）：静岡市教育委員会、静岡県教育委員会、

在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ

企画協力：株式会社ホワイトインターナショナル



静岡新聞 SBS

# 「ブルターニュ絵画」の殿堂、カンペール美術館

カンペール美術館は、1872年にブルターニュ地方のフィニステール県カンペール市に開館しました。当初そのコレクションの中核を成していたのは、1864年に同市に寄贈されたジャン＝マリー・ド・シルギー伯爵の収集品で、フランス、イタリア、オランダの古典的名画で構成されていました。しかし1880年代に館長のアルフレッド・ボーが廃れつつあるブルターニュの伝統を守るべく、この地域に取材した絵画作品の収集へと舵を切ります。その後もこの方針は引き継がれ、アカデミズムからボン＝タヴァン派、ナビ派、20世紀美術を網羅するフランス随一の「ブルターニュ絵画」コレクションが形成されました。



©musée des beaux-arts de Quimper

## みどころ

### 1 絵画を通して見るブルターニュ

地方や異国への関心が高まりを見せた19、20世紀。画家たちは新たなモチーフを求めてブルターニュを訪れました。絵の中に現れる圧巻の自然風景や、人々が身に着ける民族衣装、信仰と結びついた伝統行事にご注目ください。

### 2 人気画家の作品が一堂に

ブルターニュで結成された画家グループとして、最も有名なのがボン＝タヴァン派です。19世紀後半、この一派の画家たちは印象派の技法を離れてクロワゾニスム様式を生み出し、さらにそれがパリでのナビ派の結成につながりました。本展ではモネやドニらの作品とともに、印象派からナビ派に至る変遷をたどります。

### 3 知られざるブルターニュの画家たち

カンペール美術館には、日本ではあまり知られていないブルターニュゆかりの画家たちの作品が多数収蔵されています。本展では暗い色調を好んだバンド・ノワール（黒い一団）のほか、パリを主眼に据えた美術史では語られることのない地元の画家たちにも光を当てます。

# 1章 ブルターニュの風景 豊穡な海と大地

フランス北西部のブルターニュ半島は、壮大な自然景観と、ケルト民族に由来する独自の文化を有する土地として知られます。その地域色豊かな文化と手つかずの自然は、近代化の時代といわれる 19 世紀以降も受け継がれました。一方、18 世紀末から 19 世紀前半にかけてパリの芸術界では、個性や感情、主観的なものを重んじるロマン主義が隆盛します。そうした中で、畏敬の念をかきたてるブルターニュの自然、過去への郷愁や異国情緒を呼び起こすその文化は、多くの画家たちを魅了しました。以降、政府が主催するサロン（官展）には、ブルターニュを主題とする絵画作品が数多く出品されるようになります。第 1 章では主に 19 世紀の官展で活躍した画家たちの作品を通して、ブルターニュの風景や風俗を紹介します。

国からの  
注文作



## 脅威とも恵みともなる海

テオドール・ギュダン 《ベル＝イル沿岸の暴風雨》1851 年 油彩／カンヴァス

サロン  
出品作



## 花崗岩の露出する大地

アレクサンドル・セジェ 《ブルケルムール渓谷、アレー山地》1883 年頃 油彩／カンヴァス

サロン  
出品作



## 人々の慎ましい暮らし

アルフレッド・ギユ 《コンカルノーの鱈加工場で働く娘たち》1896 年頃 油彩／カンヴァス

## 描かれたブルターニュの伝統文化

パリでサロンの常連であったアドルフ・ルルー（1812-1891）は、ブルターニュへの旅行後、この地に取材した絵画作品を手がけるようになります。民俗学的な特徴を捉えることを得意とした彼は、「ブルターニュのルルー」とあだ名され、サロンにおける「ブルターニュ・ブーム」の火つけ役の一人になりました。ブルターニュのフィニステール県、バナレック地方を舞台とする本作は、農民たちの婚礼の場面を表しています。質素な藁ぶき小屋が立ち並ぶ村の中で、民族衣装をまとった人々が伝統的なダンスや演奏を楽しむ様子にご注目ください。



### 民俗楽器を演奏する二人の人物

座っている人物がビニウ、立っている人物がボンバルドと呼ばれるブルターニュの伝統的な楽器を演奏しています。

### 女性たちの被り物、コワフ

女性たちが被っている白い頭巾は、コワフと呼ばれる民族衣装です。レース状の長いリボンが付いているのが特徴ですが、その形状は地域によって異なります。



国からの  
注文作



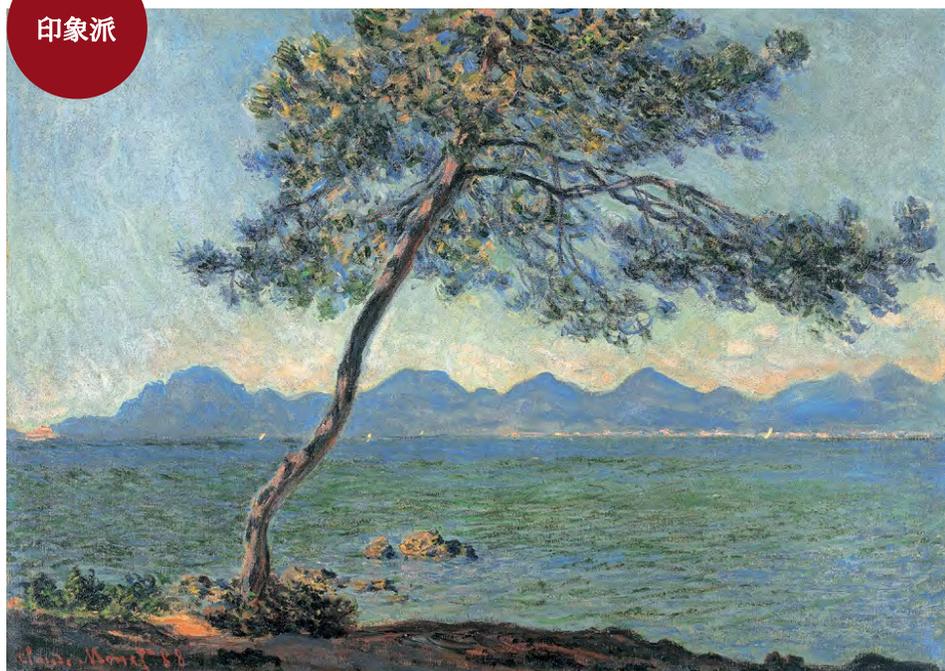
### 音楽に合わせてダンスに興じる人々

バナレック地方の民族衣装に身を包む人々が、笛吹き演奏にあわせて、ダンスを踊っています。左端で手を取り合い踊っている男女が、花婿と花嫁。楽しく、幸せそうな様子が伝わってきます。

## 2章 ブルターニュに集う画家たち 印象派からナビ派へ

1880年代半ば、ブルターニュを舞台としてフランス近代絵画史は新たな局面を迎えます。印象派の筆触分割に代わり、ブルターニュを拠点としたポール・ゴーギャンらポン＝タヴァン派の画家たちが、クロワゾニスムと呼ばれる新たな技法を生み出したのです。この技法は黒い輪郭線で鮮烈な色味の色面を囲むというもので、彼らはこの非再現的な絵画様式によって心象的なイメージを描き出すことを目指しました。その後、クロワゾニスムはポール・セリュジエによってパリに持ち帰られ、その影響を受けたモーリス・ドニやピエール・ボナールらがナビ派を結成しました。第2章では、印象派からポン＝タヴァン派、そしてナビ派に至る美術史の変遷をたどります。

印象派



### モネの 筆触分割

筆触分割は、パレットで絵具を混ぜずに、純粋な色の小さなタッチをキャンパスの上に並べていく技法です。見る人の目の中で色同士が混ざり合うようにすることで、かつてない明るい色彩の表現が可能になりました。

クロード・モネ 《アンティープ岬》  
1888年 油彩／カンヴァス  
愛媛県美術館

「クロワゾネ(中世の有線七宝)」という言葉に由来する「クロワゾニスム」は、鮮やかな色面を黒い輪郭線で囲む技法です。モレが手がけた本作にも、平面性と装飾性を特徴とするこの技法の影響がよく表れています。

アンリ・モレ  
《ポン＝タヴァンの風景》  
1888-89年 油彩／カンヴァス



ポン＝  
タヴァン派

## ポン＝タヴァン派のクロワゾニスム

## ポン＝タヴァン村での出会い、別れ



ポン＝タヴァン派の中心人物ゴーギャン(左)と、ナビ派への橋渡しを行ったセリュジエ(右)。遠くの海を指さすゴーギャンの身振りは、彼がこの後にブルターニュの小村ポン＝タヴァンを離れ、タヒチに向かうことを暗示しています。

ポール・セリュジエ《さようなら、ゴーギャン》1906年 油彩/カンヴァス

## ポン＝タヴァン派の リーダー、ゴーギャン

ポール・ゴーギャン《ブルターニュの子供》  
1889年 水彩・パステル、紙  
福島県立美術館



ナビ派

## ドニが描くパルドン祭

パルドン祭は、ブルターニュを代表する宗教行事です。人々は伝統的な衣装を身に付け、村の教会や礼拝堂に集合し、ミサ（祭儀）を行い、聖遺物を掲げながら行列をなして村を練り歩きました。この行事は今日も続いています。

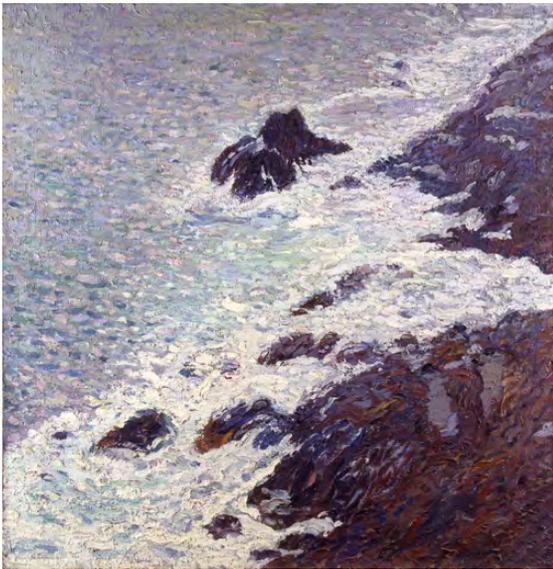
モーリス・ドニ《フォルグエットのパルドン祭》  
1930年 油彩/カンヴァス

# 3章 新たな眼差し 多様な表現の探求

クロワゾニスムの誕生より少し前、パリでは新印象派の画家たちが、筆触分割を応用して、明るい色の小さな点で画面を構成する点描法を考案しました。ポン＝タヴァン派の中でも、フェルディナン・ロワイアン・デュ・ピュイゴドーをはじめとする一部の画家たちの作例には、印象派や新印象派からの影響が見受けられます。こうした筆触分割に基づく技法は、世紀転換期にフランス芸術家協会で活躍したアンリ・マルタンによっても取り入れられますが、一方で同時期には、暗い色調でブルターニュの景観を描く一派、バンド・ノワール（黒い一団）も頭角を現しました。さらに 20 世紀に入ると、パリでは鮮烈な色彩表現を行うフォーヴィスムや、斬新な幾何学的構成を好むキュビスムが現れ、こうした動向と歩を合わせて、ブルターニュの画家たちも多様な表現を探求していきます。第 3 章ではパリの美術潮流との関わりに注目しつつ、ブルターニュにおける印象派以降の表現の広がりをもひも解きます。

## 抒情的な光を描く ピュイゴドー

フェルディナン・ロワイアン・デュ・ピュイゴドー  
《藁ぶき屋根の家のある風景》1921年 油彩／カンヴァス



## サロンの新星、マルタン

アンリ・ジャン・ギヨーム・マルタン  
《ブルターニュの海》1900年  
油彩／カンヴァス

バンド・  
ノワール

## 黒い一団、 バンド・ノワール

鮮やかな色彩表現が好まれた 19 世紀末から 20 世紀初頭にあって、バンド・ノワールの画家たちは暗い色調を重んじ、ブルターニュに着想を得た作品の数々を、パリの展覧会に出品しました。このグループの中でシャルル・コッテは中心的な役割を果たしました。

シャルル・コッテ《嵐から逃げる漁師たち》  
1903年頃 油彩／厚紙



## アクセス

電車 JR 静岡駅北口より地下道を利用して徒歩3分  
静岡鉄道新静岡駅より徒歩5分

新幹線 東京駅・名古屋駅から東海道新幹線ひかり号で約1時間  
新大阪駅から東海道新幹線ひかり号で約2時間

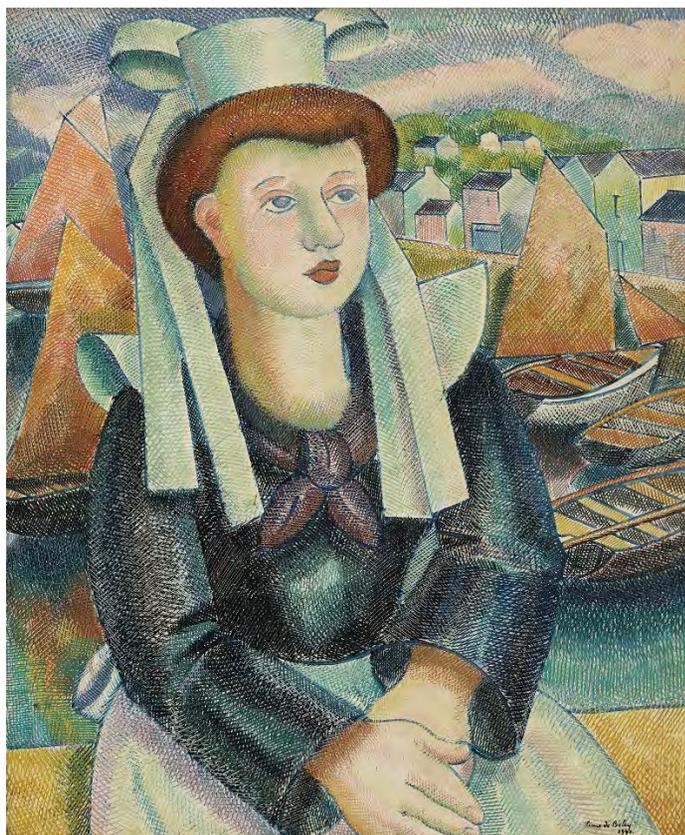
車 東名静岡ICより約15分  
※お車でお越しの際は、近隣の駐車場をご利用ください。

空路 富士山静岡空港より静鉄バス  
(静岡エアポートライナー)で約1時間



## 関連事業

展覧会チラシ、当館ホームページをご覧ください。



ピエール・ド・ブレ  
《ブルターニュの女性》1940年  
油彩/カンヴァス